

成人した娘と母が語る「母娘関係」 —フォーカス・グループ・ディスカッションの結果から—

国立社会保障・人口問題研究所 人口動向研究部 第2室長 釜野 さおり

法政大学 グローバル教養学部 教授 コー ダイアナ

国立社会保障・人口問題研究所 国際関係部 第1室長 千年 よしみ

京都華頂大学 現代家政学部 教授 斧出 節子

本稿では2017年2月～3月、「東アジアにおける母娘間の親密性—異性愛・ジェンダー・家族規範の交渉の質的分析」¹の研究過程で行った母娘関係に関するフォーカス・グループ・ディスカッションの結果を報告する。まず1で本研究課題の全体像、2で研究方法と今回実施したフォーカス・グループ・ディスカッションの位置付けを述べ、3で母娘関係とその理想像に関する語りの一部を紹介し、4で考察と今後の課題を述べる。

1. 研究課題の全体像

この研究の目的は、日本と香港において、異性愛と非異性愛（同性愛・両性愛など）の娘と母との間の「親密性の実践」の分析を通して、異性愛規範、ジェンダー規範、家族のあり方がいかに交渉されるのかを探ることである。母娘関係における「親密性の実践」(Jamieson 2011)、すなわち両者の関係において親近感や、互いを気にかけ、互いが特別な存在であるという感覚を作り出してそれを維持するプロセスに加え、母娘間が親密であることを前提としないアンビバレンス(田淵 2013)な側面にも注目する。本研究では、異性愛を前提とした従来の母娘関係の研究と、カミングアウトについての分析が中心となりがちで、親子の支援関係等にはほとんど触れていない非異性愛者のいる家族の研究との融合をはかり、

異性愛モデル中心の「前期近代」から、「後期近代」への移行に伴う親密性がどのように展開・収斂されていくのかを明らかにすることを目指す。

2. 研究方法

本研究では、女性が母・娘として、「母娘関係」をどのように経験し、その関係をどのように認識しているのか、その関係性を日常的にどのように交渉しているのかをとらえるために、フォーカス・グループ・ディスカッション（以下、FGD）と、個別インタビューを用いる。母娘関係はライフステージによって変化すると思われるが、本研究では、結婚や出産にさしかかることが期待される20代後半から、子が成人するステージに相当する50歳前後までの娘とその母を対象とする。

FGDとは、研究テーマに関する事柄について、焦点を定めたディスカッションを行う目的で、属性や他の特徴が明確に定義された集団に属する人を集め、研究者の関心事項に対する参加者の気持ち、態度、考え方などを引き出すデータ収集法である。ディスカッションは、研究者側が準備したガイドラインに沿って、モレーティによって進められる。FGDのモレーティーは、どの参加者もまんべんなく話し、参加者同士の自発的な対話が促されるように配慮する役割をもつ（千年・阿部 2000）。

実施の概要は以下のとおりである。

- ・調査時期 2017年2月から3月
- ・調査対象：「娘」：28～50歳で、有配偶の女性（※）
「母」：28～50歳の娘を持つ女性
- ・グループ編成
「娘」：本人の学歴によって分けた2組（D1、D2）
「母」：本人の学歴と娘の結婚状況によって分けた4組（M1～M4）

		参加者本人の属性	参加者の娘の属性
娘 グル ープ	D1	大卒以上、有配偶、子あり・なし含む、無職・有職含む	
	D2	短大・専門学校・高校卒、有配偶、子あり・なし含む、無職・有職含む	
母 グル ープ	M1	大卒以上、有配偶	有配偶（子あり・なし含む）
	M2	短大・専門学校・高校卒、有配偶	有配偶（子あり・なし含む）
	M3	大卒以上、有配偶	未婚・離別
	M4	短大・専門学校・高校卒、有配偶	未婚・離別

※FGDや事前調査票では参加者（およびその母や娘）の性的指向を直接たずねていないが、これらの女性が「異性愛者」というアイデンティティを持っているか否かは別として、婚姻歴や語り内容から、異性愛女性であるとみなすこととした。

今回のFGDの実施にあたっては、参加者のリクルート、連絡調整、会場設定、モデレーターを新情報センターが担当した。各グループの人数は、先行研究で最適であるとされている人数（4人）を参考とし（千年・阿部 2000）、当日のキャンセルも見込んで5人に設定した。（以下の語りの引用では、グループ名とその中の個人番号a～eを用いて、M1aといった形で表記する。）調査当日は、会場で参加者に基本属性および家族やジェンダーに関する意識をたずねる事前調査票を記入してもらい、それを回収した後にディスカッションを開始した。同一のモデレーターが全グループの進行を担当し、研究チームの2～3名がディスカッションの行われるテーブルから少し離れた位置で、オブザーバーとして同席した。各FGDの所要時間は2時間程度であった。

ディスカッションのテーマには、現在および過去の娘・母との関係、母娘関係における娘の夫の位置付け、理想的な母娘関係などを設定した。

3. 結果

ここでは、母と娘の考える理想の母娘関係と現実の関係の実態の語りから見えてきた特徴をいくつか紹介する²。

（1）母の語りから

母たちの語る娘との関係では、「いい距離を保っている」といった表現が目立った。距離をもつことは、多くの場合肯定的な意味合いで語られたが、アンビバレン特徴も混在していた。

M1bさんは娘の方が距離をとっている、と感じている。「まだ孫も1歳2ヶ月、かわ

いい盛りなんで。もうただ、かわいいかわいい。行けば、べたべたしたくなっちゃうんですけど。まあ娘のほうが（私と）距離を置いてるかな。」（M1b）

M1aさんは、娘との独立した関係を評価しつつ、手放しにそれを良いと思っていないところもある様子である。

「…なんか精神的にお互いにすごく持ちつ持たれつ。独立した関係をずっと保ってこれたな、とは思ってます。下手に甘えてこないのも良し悪しなっていうのはありますよね。」（M1a）

また、M4cさんは「仲は悪くないんですけどね。（娘との）距離が近づきようがないっていうか、心が薄いっていうか、奥行きがないっていうか、（言い方が）難しいんですけど。」と、娘との現在の関係よりも、もっと深くあるべき・ありたいとの考えを語っている。

自分の生き方や見守る姿勢が娘から評価されていると感じるが、口出ししない関係は、「母娘の関係」のイメージとは異なるとらえている場合もある。

「専業主婦でもお母さんのやりたいようにやってきたから、それはそれでいいって、（娘は私のことを）ちゃんと認めてくれていい。／…／（私は私で、娘に）口に出さずに見守るっていうふうに決めてるので、（娘は）そこを一番評価してくれてると思います。／…／でも、母と娘の部分もないって言ったら、うそになると思うんですが…。」（M4a）

こうした「よい距離感」は、M2aさんの場合、精神的なサポートや、ちょっとしたことを気にかけることで保たれているようである。

「私が悲しいことがあったりすれば、やっぱり慰めのメールが来たりとか。長女と距離はあるんですけども、私が体調悪い時

とか、そういう時はメールが来たり…。あと、私がスイミングの大会に行ったりすると「ママどうだった？」とか、そういうことはなんか気にして、長女は声を掛けてくれますね。」（M2a）

M1dさんのように、距離が近すぎることを娘との関係の中での課題として挙げた例もある。

「べったり。私からすると、もうちょっと恥ずかしいぐらいで、距離をもうちょっと置かないといけないなという状況です。娘がうちに依存し過ぎだと思いますし、私たちも甘やかせ過ぎだと思ってます。もうちょっと何とかしなきゃいけないかなとは思ってるんですが。」（M1d）

理想的な母娘関係についてたずねた場合の語りでも、「距離」を置く、「付かず離れず」、「持ちつ持たれつにならない」といった形で、距離感の重要性が述べられている。

「理想は、（娘が）結婚しているんであれば、その家庭とうちの家庭はやっぱり距離を置きたいし、会いたい時だけ会うっていうのが、理想かなと思います。」（M2e）

「すごい一般的なんですけれど、付かず離れずの関係でいたいなとは思ってるんですね。周り見ても母と娘って仲がいいのって、「あ、仲いいんだな」と思います。私が（母と）そういう経験がなかったので。だから（娘とは）仲良くしていきたいなっていうのが、一番で。何かあったときもお互いに支え合えるような感じにはなっていきたいなとは思っています。」（M1b）

「お互いに迷惑をかけない。持ちつ持たれつにならない。お互いに同じ立場で、ものが言い合えて、一人だけに頼らない。どんなときでも（それぞれが）ピンと立ってられる。それが一番私はいいかなと思ってるんですよ。／…／それをちゃんと認め

て、尊重して、集まったときには、みんなでわーわー。そういうのでいいかなって思っています。」(M4d)

ここで示したように、母親にとって娘との「距離感」は、関係性の経験や評価において、重要な役目を果たしていると言える。

(2) 娘の語り

次に、娘の語りで顕著であった「尊敬」の念への言及と、自分にも娘がいるという数人が語った「母親との関係よりも、娘との関係の方が理想像に近い」というとらえ方を紹介する。

「母を尊敬する」という語りを見ると、そう感じる背景はさまざまであることがわかる。

「やっぱり人生の先輩っていう立場のほうがおっきいですね。仕事の愚痴もすごいお互いに言い合うし、「こういうことがあって嫌だった」っていう話とかの方が多いと思います。何か会うとそういう話が多くて、LINEとかだともう簡単な面白い話、世間話をするっていう感じですね。」(D2d)

D1cさんは母親がずっと仕事をしてきたことや、自分と比較して今も活動的であることを、母を尊敬する理由として挙げている。

「私と母ってやっぱり真逆なんですけど、私は母をすごく尊敬していて、母はずっと仕事をしてきたので。私は今仕事をしていますけど、何か嫌なことがあるともう母に「仕事辞めたい。もう専業主婦に戻りたい」って、やっぱり（私は）（きょうだいの上から）3番目なのですごい泣きに入るんです、母に。でも母は、「あなた、今どきね、働きに行ってない女性はいないのよ」という感じで言われて「はーい」みたいな感じで、そこが本当に真逆です。私は、

どちらかっていうとネコタイプ、お家にじつとしていたいタイプで、でも母は、家事なんかしなくてもお友達とご飯を食べに行ったりとか、昔やっていたPTAのお友達とご飯食べに行ったりとか、もう80（歳）近いんですけど、すごく人生を楽しんでいる。すごく私は尊敬、そういう母になりたいなって思っているけどできない自分、そんな感じです。」(D1c)

母親が「家族想い」で自分を犠牲にしてきたことを尊敬するとの語りもある。

「自分が実際見てきたことだけで言えば、本当にでも家族想い…。自分のことを犠牲にしてでも、やっぱり子どものことをすごく考えてたと思う。もう怒涛のような20年間をずっと子育てで追われてきたと思うんですけど、（子どもが）4人もいて、父も別にそんなに収入が少なかったわけじゃないんですけど、やっぱり自分も働かなきやなって意識があったみたいで。働きながらずっと子どものために貯金してたんですね。で、結婚するときに私もどんつてもらったんですけど…/…すごい家族想いの母だなって思いますね。尊敬します。」(D2d)

これらの語りから、娘の母に対する尊敬の気持ちは、「妻、母」という役割に限定されず、多面的な評価に基づいていると言える。

自分にも娘がいるという娘が母娘関係の理想を語る際、母との関係では達成できなかつた理想を娘との関係に求める語りが見られた。たとえば、D1aさんは、干渉されることの多かった母との関係を反面教師とし、理想に近い関係を娘との間で実現しようとしているようである。

「やっぱり一人の人間ですので、親子であっても。やっぱり個人を尊重していくのがいいんじゃないかなとは思います。いく

ら子どもでも、やっぱり別の人間ですから。娘にもそうすけれども、娘もやっぱり自分のやりたいことをやって生きていけばいいなと思いますし、やっぱり一人の人間として尊重して、と心掛けております。/…/私たちの時代はやっぱり、親から割と（いろいろ）言われるし干渉も受けて、（親と）お友達、っていうのがなかったんですよね。だから子どもはやっぱり母親のコピーじゃないっていうんでしょうかね。娘の幼稚園で司祭さまから「子どもはみんな神の子で、神様から預かっているんだと思って育ててください」って言われたんです。「ああ、そのとおりだな」と思って、自分の子だと思うからエゴが出るし、と思って、そういうないように育てております。」(D1a)

D1a さんは逆に、母の自分との関係でよかつたことを、娘との関係でも実践していきたいとの考えを示す語りもある。

「私もやっぱり、干渉すべきところは干渉して、ただ本当にすべきじゃないところはある程度距離を保って、っていうのがいいかなとは思っているんですが、（自分が）一人っ子なのできょうだいがいないからどうなんだろうって、母との距離はすごい近いのかなとは思うんですけど。自分がこうしたいっていうふうな意見があった時にきっと母はそう思ってないんだろうなっていうので、（母は）言わないけれども娘としては何となく気付くところはあって、きっとこれは向こうにとっては「うーん」と思っているんだろうなっていうのは、たまにやっぱり感じるときがあります。ただ、「うーん」と思っていても、（母が）背中を押してくれたりだと精神的にサポートしてくれたりだと、そういうふうに接してくれるので、そういうところは本当に助かっているし、自分に娘ができたときもそういうふうにい

したいなとは思います。」(D1e)

これらの娘の語りからは、母との関係を振り返りながら、自分の娘との関係を作っていくことになろうことがうかがえる。

以上、FGDにおける実際と理想の母娘関係の語りから浮かびあがった、母娘関係のいくつかの側面を紹介した。

4. 考察とまとめ

今回のFGDでは、設定した質問の性質上、個人がそれぞれの状況を話すことが適切であったこともあり、参加者が順に話す形となった。したがって、FGDで期待される参加者同士の自発的なディスカッションの場面は少なかった。一方で、すべての参加者がまんべんなく話し、また、他の参加者が語ったことを踏まえた発言があるなど、一定の相乗効果も見られたことから、有用なデータ収集法であったと言える。

本稿では研究途上で行ったFGDの結果を一部紹介した。母娘関係における親密性をとらえる上で、「距離」が鍵となっていることが示唆される。その語りの中での「距離」には、物理的なもの、精神的なもの、互いに干渉し合わないといった行動面でのものなど、さまざまな側面が混在しているため、これらを丁寧に読み解く必要がある。また、母娘それぞれの教育レベル、娘の結婚状況や子の有無などの属性による差異の検証に関しても、掘り下げた分析が望まれる。

なお、本研究の目的には異性愛規範に関する考察を含めており、今回のFGDでも、母親には仮に娘から「同性愛者である、あるいは同性のパートナーがいる」と話された場合、どのように反応すると思うか、娘には、「自分が同性愛者である、あるいは同性のパートナーがいる」と母親に話すと思

うかをたずね、さまざまな回答を得ている。本研究の初期に別途行ったFGDからも、娘の性的指向やパートナーの性別は、母娘関係に異なる課題をもたらすことが確認されている(Khor and Kamano 2017)。本プロジェクトでは、今後、香港で行ったFGDの結果も参照しながら個別インタビューを企画し、母娘関係に関する研究を進めていく予定である。

(注)-----

- ¹ JSPS 科研費 (JP26285120) 「東アジアにおける母娘間の親密性-異性愛・ジェンダー・家族規範の交渉の質的分析」(基盤研究(B)) [研究代表者: Khor, Y. T. Diana(法政大学), 研究分担者: 釜野さおり・千年よしみ(国立社会保障・人口問題研究所), 斧出節子(京都華頂大学), 研究協力者: Wong, Day · Kam, Lucetta (Hong Kong Baptist University)]
- ² 本稿で引用した語りは、原則、FGDの録音の文字起こしに基づくが、必要に応じて、微修正をしている。語りの中略箇所は/…/、執筆者による補足は()内に表記した。

【参考文献】

- 千年よしみ・阿部彩, 2000, 「フォーカス・グループ・ディスカッションの手法と課題: ケース・スタディを通じて」『人口問題研究』56(3): 56-69.
- Jamieson, Lynn, 2011, "Intimacy as a concept: Explaining social change in the context of globalization or another form of ethnocentrism?" *Sociological Research Online* 16(4): 1-22. Retrieved from <http://www.socresonline.org.uk/16/4/15.html>.

Khor, Diana and Saori Kamano, 2017,

"Practices of Intimacy: Mother-Daughter Relationships in Hong Kong and Japan," *GIS Journal: The Hosei Journal of Global and Interdisciplinary Studies*, III:1-29.
田淵六郎, 2013, 「家族研究と“親密性”」『上智大学社会学論集』37: 17-34.

著者プロフィール

釜野 さおり (かまの さおり)

スタンフォード大学大学院社会学研究科博士課程修了(Ph.D)。現在、国立社会保障・人口問題研究所 人口動向研究部 第2室長。

主な論文に「性的指向は収入に関連しているのか—米国の研究動向のレビューと日本における研究の提案—」『論叢クィア』5: 63-81(2012)、「同性愛・両性愛についての意識と家族・ジェンダーについての意識の規定要因』『家族社会学研究』29(2): 200-215 (2017) など。

コー ダイアナ (KHOR, Diana)

スタンフォード大学大学院社会学研究科博士課程修了(Ph.D)。現在、法政大学グローバル教養学部 教授。

主な論文に "Negotiating Heteronormality in the Heterosexual Mother-Lesbian Daughter Relationship," (with S. Kamano) 『家族社会学研究』25(2): 124-134(2013)、 "The Production of Knowledge: A Case Study of Government-funded Women's Gender Studies Program," *Gender and Sexuality*, 9: 31-61(2014)、 "Gender Research in Japanese Sociology: Complicit or Critical?" *GIS Journal: The Hosei Journal of Global and Interdisciplinary Studies*, 1:113-134 (2015) など。